

碑・玩具・版画に表現され、記録された日清戦争 —新たな教材と資料を求めて—

西尾 林太郎

はじめに

同時代の人々あるいは後世の人間に情報を伝達し、理念や理想そしてその時の感情を伝える際、また自らのために記録を残す時、文字や画像によることが一般である。一方で、時にはデフォルメされ強調されながらも、踊りや演劇などの芸能や彫刻・碑などの立体物によることもある。また、子供達の遊戯やその道具である玩具にそれらが表現され、記録されることも少なくない。歴史研究の諸領域ではこうした文字や画像による記録や彫刻・碑は広く史料または資料と呼ばれる。

ところで、私は金沢の大学や本学で長らく日本近代政治外交史を講じてきた。学生にとって、日清戦争は、日露戦争や日中戦争そして「太平洋戦争」と比べ、実に影の薄い戦争であるし、関心の持ちにくい戦争であるようだ、と気付いて久しい。これに対し、日本近代史において、日清戦争が有する歴史的意義は大きいと言わざるを得ない。日本にとって日清戦争は「脱亜」への大きな第一歩であったし、それは近代日本最初の「大戦争」であり、その後の日本の開戦外交や戦術さらに戦時体制の基本モデルとなった。そして、それはアジアにおける近代帝国主義勢力による分割競争の端緒を開いた。また、それは日本軍による一般市民に対する大殺戮が行われた戦争でもあった。この発端はともかく結果的には2万人余りの旅順の住民が殺されたという。以上のような日清戦争に対し、学生達に関心を持たせるためにはどうしたらいいか、彼等にこの戦争を少しでも「身近な」ものを感じさせるにはどうしたらいいか。

そこで、私が着目したのは、さまざまな形で表現され記録された物すなわち資料または史料である。それを学生の目の前に提示することで、学生たちの関心を引き出し、少しでも主体的に日清戦争について考えさせることが出来ないか、と思ったのである。すなわち、これまでの各分野の研究者による成果に若干の私見を加えながら授業を淡々と進めるのではなく、生の史・資料が持つ新鮮さと活力を学生達に伝えつつ、その史・資料によって日清戦争について彼等に様々な視点から捉えさせ、その戦争について関心を持たせたいと私は考える。

ところで、日清戦争を記録したものとしてまず想起されるのは、文字によるものである。日露戦争と比べれば数の上で少ないのであろうが、公刊されたものに限って見ても、参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』(1907年)、海軍軍令部編『二十七八年海戦史』(1905年)、博文館編・刊『日清戦争実記』第1～50号(1894～1896年)などかなり多数にのぼる。かかる記録は、例えば最近の研究のひとつである檜山幸夫『日清戦争—秘蔵写真が明かす真実—』(講談社、1997年)の巻末所収の「主要参考史料文献資料」において詳細に挙げられ、檜山氏ほか何人かの研究者によって紹介され、利用されてきた²⁾。

しかし、日清戦争の記録はこうした文字によるものばかりではない。写真や版画などの画像もまた、資料として重要である。檜山氏による研究はその意味でも貴重である。それはまた教育の場においても資料として教材として重要であり、今後大いに活用されるべきであろう。しかし、碑などの立体物や人形、双六など玩具もまた資料として、また教材として重要である。

本稿は、従来資料として顧みられることが少なかった碑³⁾や全く資料として活用されてこなかった人形、双六など玩具を歴史研究の資料として、あるいはテーマ設定の素材としてさらに歴史の授業の教材とすることを提案するものである。

1. 名古屋の「第一軍戦死者記念碑」

名古屋の覚王山日泰寺(名古屋市千種区)の境内の外れに全長 20 メートル余の「第一軍戦死者記念碑」が建っている。それは、日泰寺の境内を南北に縦断しそれを東西に二分する姫ヶ池通りに面し、ちょうど霊安堂の直ぐ裏隣にあたる。その第一軍戦死者記念碑(以下断りが無い限り、「記念碑」と記す)は、巨大な砲弾を載せた円柱の碑(モニュメント)を台石の上に載せるという、きわめて特徴的な建造物である。円柱状の碑身の背面には「東京砲兵工廠製造 凶按陸軍技手松本義徳 模型彫刻大熊氏廣 明治三十三年六月竣工」とある。さらにまた、砲弾と円柱状の碑身を載せた台石とさらにその下の台座は共に正八角形で、台座には一辺(長さは約 4.2 メートル)につき各 3 門、合計 24 門の大砲(野砲,山砲)の砲身が埋められ、それらはあたかもボールのように直立しつつ台石を取り囲んでいる。この点も特徴的というか、それは異様にすら感ぜられる。

そもそもこの「記念碑」は初めからここにあったのではなく、当初は名古屋の中心にあった。すなわちそれは名古屋駅から納屋橋を経て東にほぼ真直ぐに伸びた広小路通と武平通とが交差する所にあった(絵葉書、写真 1)。そこは、明治・大正のころまでは愛知県庁、愛知県会議事堂、名古屋市役所がそれぞれその交差点に面して建ち並ぶ、愛知県のそして名古屋市のいわば中心であった。今日、名古屋市役所があったところには中区役所が、愛知県庁、愛知県会議事堂が隣り合わせて建っていたその場所には、第一生命ビルや NTT 栄ビルなどがそれぞれ建

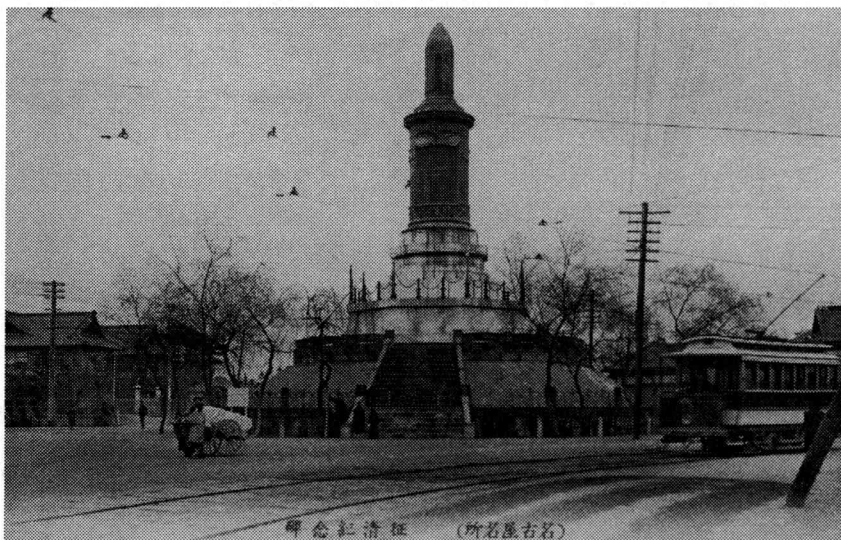


写真 1 在りし日の「記念碑」、左の建物は愛知県会及び愛知県庁

っている。大正9(1920)年、その「記念碑」は今の所に移された(写真2)。

ところで、ここで言う「第一軍」とは日清戦争におけるそれで、名古屋に司令部を置く第3師団と同じく広島第5師団からなっていた。第3師団の師団長はその後日露戦争を首相として指導した陸軍中将桂太郎(長州)、第5師団の師団長は陸軍中将野津道貫(薩摩)。第一軍の司令官は当初、陸軍大将山県有朋(元首相)であったが、明治27(1894)年12月に野津が山県と交代している。参謀長は小川又次で、参謀本部第2局長として明治20(1887)年に「清国征討策案」を立案した人物である⁴⁾。一方、司令官の山県は、明治23年12月に開会された第1帝国議会において、首相としてその一般演説のなかで軍拡が必要であるとし、「主権線」の安全に密接に関する「利益線」について述べ、朝鮮半島がそれであるとしている。こうした認識の背景には1885年に計画が発表され、ヨーロッパロシアと極東ロシアとを結合せんとしたシベリア鉄道に対する危機感があった⁵⁾。

さてその後、第1師団(東京)と第6師団(熊本)の一部である第12旅団および第2師団(仙台)により第2軍が編成されるが、戦争勃発当初は(正確には勃発前後だが)、第5師団、第3師団の順に朝鮮半島に派遣され、朝鮮軍とさらには清国軍と戦った。すなわち第一軍は日清戦争における日本軍の先鋒であり戦争の前半における主力であった。従って、後に述べるようにこの「記念碑」と全く同じものが広島市にも建てられた。広島のそれは第5師団の西練兵場に建てられ⁶⁾、そのまま昭和20年に至ったが、米軍の空爆により破壊され(原爆の爆心地の近くにあった)、今はない。『広島市史』によれば、碑の本体すなわち碑身が約11メートル、台石部分の高さは約4.5メートル、さらにそれら載せている二重の台座の高さは約5メートル、地表から砲弾の形をしたモニュメントの先端までの高さは約20メートルであった⁷⁾。

さて、この「記念碑」の碑文には次のようにある。

明治二十七八年ノ役第一軍ノ戦大小五十余回、此間九閱月隆暑ヲ冒シ邪寒ヲ凌キ深く不毛ノ地ニ入り露宿糲食衆皆瘦骨立ス、然レトモ士氣益振ヒ堅ヲ破リ鋭ヲクダキ向フ処悉ク克ツ而シテ戦死スルモノ実に七百二十六人夫レ生ヲ捨テ義ヲ取ルハ将士ノ分ナリ諸子能ク一死以テ君国ニ報ス遺憾ナシト謂ウ可シ況ヤ

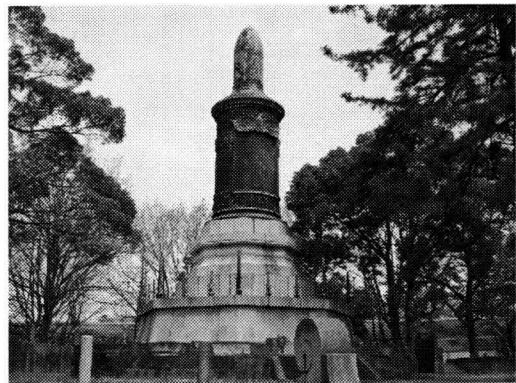


写真2 現在の「記念碑」 2006.1.6 撮影

至尊其ノ際ニ親臨シテ幣帛ヲ賜ウ天下欽慕歎賞セサルナシ榮何モノカ之ニ加エン然リト雖モ逝者ハ終ニ還ラス生者独リ国光ノ四表ニ発揚スルヲ楽ム同軍ノ将士殊ニ痛悼ニ堪エサルモノアリ乃チ相謀リ碑ヲ第三第五師団ノ首地ニ建テ諸子ノ姓名ヲ録シ以テ聊カ忠魂ヲ弔ヒ遺烈ヲ永世ニ表彰ス

明治二十九年三月九日

第一軍司令官陸軍大将正三位勳一等功二級 伯爵 野津道貫 撰

第一軍参謀長陸軍少将従四位勳二等功三級 男爵 小川又次 書

この碑文は第一軍司令官であった野津が起草し、その参謀長を務めた小川の揮毫によった。

その内容は大体次の通りであろう。

第一軍は9ヶ月余りの間に大小50回余りの戦闘を経験した。それも猛暑と厳寒の時期に荒野にあって露営と粗食のため、将兵は皆疲れ果て瘦せて行った。しかし、士気は高く、強敵を破り、連戦連勝であった。しかし、戦死者は726名にものぼった。戦死者は君国に報じたのであり、彼らにとって遺憾なしと言うべきだが、生還した側にしてみれば自分達だけが国威の発揚を目の当りにするのは心苦しい限りである。そこで、第一軍の将兵たちがそれぞれ第3師団、第5師団の本拠の地に戦死者の姓名を記録した碑を建て、彼等の霊を弔い、その業績を永久に讃えるものである。

この碑文にあるように第一軍の将兵たちは9月から翌年4月にかけて、猛暑から厳寒へと大きく変化する大陸性の気候の下で、朝鮮半島から鴨緑江を越え「満州」各地を転戦した。確かに9ヶ月あまり続いた戦闘での第一軍の戦死者は726名であったが、疲労と食糧不足そして衛生不良などによる体力の著しい低下のため、戦地で病気に罹る者が少なくなく、復員の前後に病死した者が多かった。台湾領有戦争における数も含まれるが、日清戦争での戦死者1401人に対し、病死者は1万1587人と、後者は前者のほぼ8倍に上っている⁸⁾。碑文の「疲瘦骨立」は決して誇張などではなく、現実そのものであったのである。ちなみに第3師団、第5師団の死者はそれぞれ1429人、2060人で、第一軍はこの数を合わせた3489人の死者を出している⁹⁾。第一軍の戦死者は726名であった。従って病気・怪我等でその三倍以上の2763名が死んでいるのである。

なお、この「記念碑」は少なくとも名古屋市では「征清記念碑」ないしは単に「記念碑」と呼ばれた。後ほど史料として引用する『愛知県議会史』や『名古屋市会史』に明らかなごとく、愛知県議会や名古屋市会では、それぞれ公的な呼称として「征清記念碑」が使われていた。また、先に掲げた絵葉書(写真1)がそうであるように、今日残されている絵葉書の説明の殆どは「征清記念碑」となっている。ここで言われる「征清」とは「対清戦争」というほどの意味であろう。ちなみに10年後の日露戦争でも「征露」という言葉が頻繁に使われた。

2. 「記念碑」建立

日清戦争の記録物として最大かつ効果的なのは記念碑であろう。効果的というのはそのスケールの大きさや意匠によって、それを見る多くの人々に強い印象を与えるという意味である。広島市にはその最上部に金鷄を装着した、高さ16メートルの凱旋碑が戦死者の「記念碑」とは別に造られたが¹⁰⁾、少なくともそれは高さという点で「記念碑」には及ばない。すでに述べたように、広島の「記念碑」は米軍による空爆のために喪失してしまったが、凱旋碑は戦後その意匠をそのままに、「平和記念碑」という名が与えられて現存する(広島市南区皆実町6-3-10皆実町緑地)。これに対し、名古屋では凱旋碑は建設されなかったようである。少なくとも、そのことについて『名古屋市史』には全く記述されていない¹¹⁾。そうしてみると、覚王山日泰寺の境内にある「記念碑」がおそらく今日現存する日清戦争に関する最大の記念碑ではないかと思われる。

既述のごとくその「記念碑」は総高22メートル、碑身正面の碑文は第一軍司令官であった野津と同参謀長の小川によっており、碑背には戦死者726名の官名と氏名が記されている。碑

文の上部には金鶏が、「戦死者名簿」中央の上部には帝国陸軍のマークである金色の星がそれぞれ付されている。さらに碑文と「戦死者名簿」の下部には歩兵銃、背囊、スコップ、ツルハシ、斧、水筒、サーベル、喇叭(ラッパ)など、戦場における将兵にとって身近なものがレリーフとして帯状に彫られている(写真3)。以上のような碑身の意匠、すなわち碑文・戦死者名簿・

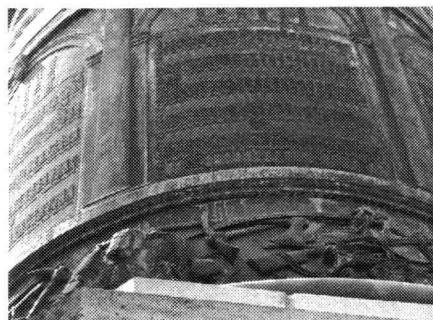


写真3 碑身基底部のレリーフ



写真4 砲身による柵

レリーフが施された円柱とその上に置かれた巨大な弾丸という意匠はいったい何を意味するのか。そして先にも述べた、この碑身を柵のように取り巻く大小24門の大砲群(写真4)。これが意味する所は何であろうか。

碑身からイメージされるのは天空に向けられた大砲から巨大な砲弾が放たれる様である。その砲弾は第一軍の戦死者726名の魂魄を象徴するようでもある。他方、同様に天空を仰ぐ24門の大砲であるが、砲身が長いのが野砲、短いのが山砲で、その数はそれぞれ8門、16門である。そのいずれも青銅製で、それぞれに着けられた銘板によれば明治10年代後半から20年にかけて大阪砲兵工廠で製造されたものである。また、野砲、山砲ともにその口径は7.5センチメートルで、俗に「七珊砲」(ななサンチほう)と呼ばれ、射程距離はそれぞれ5000メートル、3000メートルである¹²⁾。しかし、両者が共に第一軍により日清戦争の戦場で使用されたわけではない。少なくとも山地の多い朝鮮半島や清・朝国境付近で戦った第一軍すなわち第3、第5師団は山砲編成とされた¹³⁾。柵のように並べられ鎖で繋がられた(現在、鎖は一部しか残っていない)24門の大砲の全てが、実際に使われた山砲であってもよいはずだが、わざわざ長砲身の野砲を8門入れた理由は何か。

残念ながら、その理由は不明である。ただ、計画当初、現役の山砲の、おそらく戦争で使ったであろうそれではなく、捕獲した清国の武器を使う予定であったようでもある。ちなみに明治35年5月に「記念碑」建設の基礎工事が始まるうとしていた広島では、「周囲の柵は戦利品たる大砲を以つてし、その間を鉄鎖にて繋ぎまた柵の外二間巾は芝生を栽え」¹⁴⁾る予定であることを、地元紙『芸備日日新聞』が報じている。

これら2種類の大砲は日清戦争が終了して9年目におこった日露戦争でも、後備役の部隊ではあるが使用されている¹⁵⁾。「記念碑」建設が計画され、それが竣工した時点において、名古屋、広島における「記念碑」に使用された合計48門の大砲は特に時代遅れで廃棄処分されてもよいようなものではなく、当時の陸軍の現役の兵器であったのであり、その48という数は日清戦争開戦当時の、一砲兵連隊が有する平均36門¹⁶⁾を大きく上回る。日清戦争開戦直前、日本には近衛師団を始めとする7個師団に属する7つの砲兵連隊が存在した。そうした中で、

さらに1つの砲兵連隊の基幹装備を凌駕する、多くの数の大砲が惜しげもなく「記念碑」に使われている。計画当初の戦利品から旧式になりつつあるとはいえ現役の武器を「記念碑」のために大量に使う、という方針転換がなされたようであるが、その理由は不明である。

では、この「記念碑」はいかなる経緯で造られたのか。大正 5(1915)年に刊行された『名古屋市史』によれば次の通りである¹⁷⁾。明治 33(1900)年3月、当時第一軍に属した将校たちが相談の上、戦利品をもって記念碑を铸造し、これを第3師団司令部の所在地である名古屋市に建立することを企画した。碑は同年6月、東京砲兵工廠において铸造となり、第3師団の管下であった愛知、三重、岐阜、石川、静岡、福井、富山各県の知事もこの計画に賛同し、翌7月建設費用3万円を募集することが発表された。続いて工事に着工され、翌34年に記念碑は完成した。しかし、この「明治34年完成」という記述には大いに疑問がある(後述)。

このように『名古屋市史』は明治33年に日清戦争に従軍した第一軍の将校たちが記念碑の建設を思い立ち、それを企画したとしているが、碑文の日付は戦争が終わった明治29年3月9日である。明治29年3月といえば、近衛師団、第2師団による「台湾平定」が完了し、台湾総督府条例及び総督府諸官制が公布され、やっと日本の台湾統治が緒につき始めた頃である。まさにその時、野津元第一軍司令官による碑文が作成された。第3師団が名古屋に凱旋したのが明治28年6月であることを考慮する時、この頃から翌29年にかけての間に記念碑建設が決定されていたと考えるべきであろう。すなわち、『名古屋市史』に書かれているような、戦争が終わって5年後の明治33年になって突如この建設が決まったわけではない。松本技手が図案を決め、大熊氏廣が碑の「模型」を制作し、さらに巨大な碑身の铸造の完了という過程には1,2年の時間を要するにちがいない。3月に計画され、その年の6月に铸造が成るとするのは、いかにも不自然である。

ところで、この「記念碑」の原型ともいべきものがある。靖国神社の境内にある大村益次郎の銅像がそれである。それは明治26(1893)年に日本で最初の西洋式銅像として設置された。言うまでもなく、大村は長州藩の医師であり、日本における近代陸軍の父とも言うべき人物である。その銅像は、「記念碑」と同じ八角形の石造りの台座の上に円柱を載せ、さらにその上に大村の像を載せている。その銅像の制作者は「記念碑」と同じ大熊氏廣である¹⁸⁾。今は無いがかつてはその台座の周囲に大砲8門が八角形の台座の各辺に沿って横倒しされるように置かれ、台座上には、矢をあしらった金属製と思しき柵が大村の銅像を載せた円柱状の碑身と台石

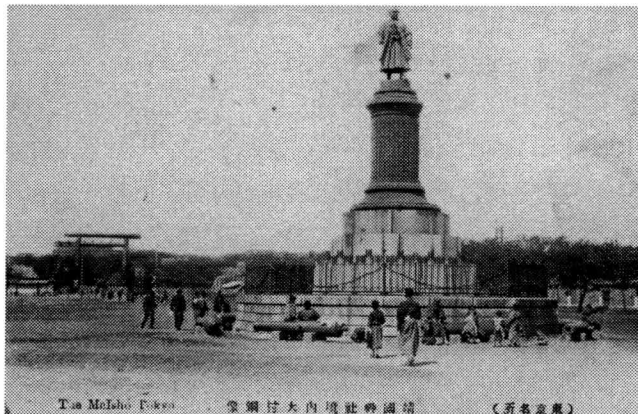


写真5 在りし日の大村益次郎銅像

を取り囲んでいた(写真5)。そのことは現在に残る各種の版画や絵葉書で確認できる¹⁹⁾。

大村像と「記念碑」を比べれば、大砲を直立させ台座に固定することによる柵が矢をあしらったそれにとって替えられ、台に載せられた砲弾が大村像と入れ替わっただけで、両者の意匠上のコンセプトはほぼ同一である。こうしてみると、銅像と記念碑が未だ未分化であった明治日本のこの時代すなわち明治20年代～30年代初めにおいて、「記念碑」は戦死者達の〈銅像〉でもあった。そうであれば、官名、姓名の違いを超えた第一軍戦死者726名の霊の化身が巨大な砲弾の〈像〉であったのであろう。

さて、冒頭で挙げた「記念碑」の銘には「図按陸軍技手松本義徳、模型彫刻大熊氏廣」とあることはすでに述べた。松本が、明治26年に完成した大村益次郎銅像を参考にして(模倣して?)「記念碑」の図案を作成し、レリーフを始めとする模型=碑身の彫刻を大村の銅像の制作者である大熊に依頼したのである。多くの大砲が碑(モニュメント)を取り巻くというのも、もともとは大熊のアイデアで、大砲の数を増やし、横倒しを直立させて柵とするなど、松本がそれを大きく発展させたと考えるべきであろう。なお、松本が「記念碑」と関るに至った経緯は史料を欠いて不明であるが、少なくとも大村像が完成した時点で、彼は工兵第一方面署詰めの4等技手²⁰⁾として東京在勤であり、完成早々の大村像を見たに違いない。

ところで、『名古屋市史』によれば、名古屋における「記念碑」は記述のごとく明治33年6月にその建設が企画され、翌年完成された。その後これが『愛知県史』を始めその他の書籍の記述にも受け継がれ、今日に至っている²¹⁾。

しかし、事実はそうではない。すでに明治32(1899)年2月、名古屋市会は「日清戦役記念碑建設の与論化」に対し、協議会を設け、全会一致でその建設に決し、「栄町通道路改修線と南武平町との交叉点中央」にそれを建設する計画を具体化させた²²⁾。これに対し、当時その交叉点に面して本庁舎があった愛知県は、その事業のために無償で敷地の一部譲渡を申し出た²³⁾。また、個人所有に係る土地について名古屋市は買収する準備を始め、同年9月名古屋市会はそのための追加予算案を修正可決した²⁴⁾。こうして、「記念碑」の建設は名古屋主導で進められ、4年後の明治36(1903)年に至りそれは完成し、竣工式を迎えた。ちなみに、名古屋に本社を置く地元紙『新愛知』は、明治36年5月6日付朝刊で、「戦死者記念碑竣工式」と題し、昨5月5日に名古屋「栄町商工品陳列館敷地に於いて征清第一軍戦死者記念碑竣工式を挙行したるが、…」と報じている。更にその翌日、豊橋の『新朝報』も同様の内容を報じている²⁵⁾。地元紙が相前後して同様な内容を報じたことからすれば、「記念碑」竣工は明治34年ではなく、その2年後の明治36年5月のことと確定してよい。では何故2年のズレが生じたのか。

先にも見たように「記念碑」の銘板には明治33年6月の竣工とあった。この「竣工」が碑身の铸造とその後処理の完了を意味するならば、確かにその翌年あたりには碑身は台座に据え付けられ、「記念碑」は完成しているだろう。铸造なった碑身が台座に据え付けられはしたが、何らかの事情で竣工式が先延ばしになったのか。あるいは碑身が据え付けられないままどこかに保管されていたのか。2年ズレ込んだ理由はその何れかであろうが、史料を欠いてそのどちらとも判定しがたい。

では、広島市の場合はどうか。名古屋市と同じものが東京砲兵工廠で铸造され広島に届けられたのは、『芸備日日新聞』によれば明治34年「秋」のことであり、铸造された碑身は野津元

第一軍司令官の寄付によるものであった²⁶⁾。広島市において「記念碑」建設計画が具体化するのには、おそらくこの時以降である。それもその具体化は明治 36 年 4 月に大阪で開催予定の第 5 回内国勲業博覧会に協賛する意味もまた大きかった²⁷⁾。

明治 35 年 2 月 25 日付『読売新聞』はその軍事彙報欄で、日清戦争の「第一軍戦捷記念碑」がこの程広島市会での「予算確定」を受け、来る 4 月上旬に起工される筈となったと、報じた。市会のこの措置は、前年「秋」の碑身到着を受けてのことであろう。もっとも、予定地の地質調査がなされたのが同年 6 月 11 日で、工事の着手はもう少し先のことであった²⁸⁾。建設された場所は第 5 師団の西練兵場大手町の突き当たりであり、事実そこに建てられ昭和 20 年に至った。

なお、明治 36 年 1 月 1 日付けで現在地元紙『芸備日日新聞』に建設中であると報ぜられ、その図面が同紙に公開された広島市の「記念碑」であるが、情報を欠きその竣工日を確定することはできない。明治 36 年 9 月上旬の時点でほぼ完成したと『芸備日日新聞』が報じていることから、例年 9 月 15 日に広島城内の西練兵場で挙行されることになっていた招魂祭の一環として、その竣工式が行われたのかもしれない。

ともあれ、デザインを松本、彫刻を大熊によった碑身は、明治 33 年から翌 34 年にかけて相ついで東京で鋳造され、それぞれ名古屋と広島に輸送された。それにしても、すでに述べた如く名古屋市は明治 32 年に「記念碑」建設に向け土地収用等の予算措置をするなど活発な行動を起こしているのに対し、広島市が行動を開始したのは竣工のほぼ 2 年前の明治 34 年後半からその翌年にかけてである。同じ第一軍に所属した師団の司令部の所在地であるのに、この 2 年余りのズレはどうして生じたのか。その理由は明らかでない。しかし、はっきりしていることは、広島市よりも名古屋市の方が「記念碑」建設に向けての計画への着手そしてその竣工ともに先んじていることである。第 3 師団の方が第 5 師団よりも犠牲者を多く出したからか。逆である。すでに見た通り、戦死者・病死者共に第 5 師団の方が多い。死者の数とは関係ないところで「記念碑」建設に向けて名古屋市がリーダーシップを取った理由は何か。広島がそうであったように、自己宣伝という側面があったのであろうか。

明治 36 年 5 月 5 日、名古屋の「記念碑」の竣工式が行われた。5 月 6 日付『新愛知』によれば主な参列者は次の通りであり、深野一三愛知県知事が式典の実行委員長を務めた。徳川義禮(侯爵、旧尾張徳川藩主家当主)、上原(勇作、のち陸相)教育監督部工兵監、大島第 3 師団長、山口・原口両旅団長、藤田控訴院長、藤堂検事長、川路岐阜県知事、南部(第 6)・石原(第 18)・野口(第 33)・島川(砲兵)各連隊長以下戦死者遺族を含む 2000 名。ここで注目すべきことは、「記念碑」建設に向けて主導的な役割を果たしてきた名古屋市の首長である名古屋市長でなく、愛知県知事が竣工式式典の実行委員長を務めるなど、式典の主導権は県ならびに軍が握っていたことである。官位などを配慮して、あるいは名古屋市側は前面に出なかったのであろうか。

ともかく式典において、まず深野が閑院宮載仁親王の令詞を、後藤愛知県庁書記官が深野知事の祝辞を、上原が野津(道貫、元第一軍司令官)教育総監の祝辞をそれぞれ代読した。続いて第 5 師団隷下の混成旅団を率いて朝鮮、「満州」を転戦した大島(義昌)第 3 師団長は、かつて第一軍に属した第 3 師団の司令官としてこの式典に参列することの特別な思いを吐露し、「同胞の鋒鏑に斃れ瘡痍に犯されて骨を異域に埋めしものありしは吾人痛惜の情に堪へざる処なし」²⁹⁾

と結んだ。「記念碑」には戦死者名しか記録されていない。これに対し、大島は戦死者の8倍近い戦病死者に対し弔意を表している。

ところで、後藤書記官によって代読された深野知事の式辞は次のようであった³⁰⁾。

明治三十六年5月5日第一軍戦死者記念碑の竣工式を挙げるに当り載仁親王殿下の令詞を賜り感激の至りに堪えず復朝野貴賓の臨場を辱くする

一三の光榮とすところなり。顧みれば二十七八年の役に吾が第三師団は第五師団と共に第一軍に属し鶏林〔朝鮮〕に入り牙山を陥れ連戦連捷終に牛莊、田莊台の大勝を得、清国をして和を請ふに至らしめたるは是れ固より

天皇陛下の盛徳稜威に頼ると雖も亦我將士が義勇公に奉ずるの至誠に由らずんばならず。而して其間忠烈の戦死をとげたるものまた寡しとせず。是れ固より軍人の本分にして其身に在りては豪も遺憾なかるべしと雖も帝国光榮の戦后益々宇宙に輝くを見るに及ばずして不還の客となれるは上下の共に痛悼に堪へざる所なり。況や其忠節万世に垂れ其義烈千載に伝ふべきに於いておや。是れ有志者の相謀りて其資を醸し記念碑を建てる所以なり。而して今や建設全く成りて其竣工の式を挙ぐるに至り巍然〇立燦然たる金鷄の光は城楼魚虎と相映照するは一三の諸君と偕に悦ぶ所なり。庶幾くは自今以後子此碑を仰瞻する〇〇は英風を欽じ益々義勇公の心を奮発して尽忠報國の実を挙げん事を。果たして然らば記念碑建設の効〇又将来に顕れんとす。之を式辞とす。

明治三十六年五月五日

第一軍戦死者記念碑竣工式委員長

従四位勳三等 深野一三

深野愛知県知事は、この式辞で名古屋城の金鯨と「記念碑」の金鷄とが共に空に映えることは参会者と共に「悦ぶ所」であるとしつつも、この碑を仰ぎみる者に対し「益々義勇公の心を奮発して尽忠報國の実」を挙げることを期待している。時あたかも、北清事変(明治33〔1900〕年)以来ロシア軍が「満州」に駐留し続けていた。南下するロシアを牽制するため明治35(1902)年に締結された日英同盟であったが、ロシアは駐留軍の兵員を増強するなど却って北東アジアにおける軍備を強化しつつあった。いわゆる「満州問題」である。このころの日本の新聞にはしばしばこの問題に関する連載物や特集が見られる。その中には対露強硬論も少なくなかった。

このような状況の中で、「記念碑」は名古屋の中心地において来るべきロシアとの戦争に向け、「義勇公の心」と「尽忠報國の実」を名古屋市民はもとより広く第3師団管区の県民に呼びかけることが期待されることになったのであろう。日露戦争が始まるのは、この竣工式の7ヶ月後のことである。

3. 玩具、図版に表現された戦争—第一軍を中心に—

明治27(西暦1894、光緒20)年6月5日、東学党の乱の勃発(甲午農民戦争)を受けて、朝鮮政府はその鎮圧のため清国政府に出兵を依頼した。これに対し日本政府は一時帰国中の大島圭介(旧幕臣)公使を漢城(ソウル)に帯兵帰任させた。その同日、第5師団に動員が下令された。同師団の大島義昌少将麾下の歩兵第9旅団(歩兵第11連隊、同21連隊)を基幹とし、輜重、工兵そして砲兵などの部隊を含む混成旅団が編成され、その部隊は数次に分かれて朝鮮に渡った。

仁川から漢城に入ったこの陸軍部隊の威圧の下で、大鳥は朝鮮政府の撤兵要求をはねのけつつ、内政改革の要求や清国による「保護属邦」論の認否確認などを朝鮮政府に突きつけた。14世紀末の建国以来、李氏朝鮮は明・清を中華と仰ぐ中華秩序に組み込まれて来たのである。7月22日、朝鮮政府は清国「保護属邦」を否定し、清国軍の迅速な撤兵を清国側に求める、と回答してきた。

これに対し、大鳥は、この回答は事実上「保護属邦」論の容認であり明治7(1873)年に締結された日朝修好条規で確認された日朝平等の理念に反するとして、ひたすら対清開戦の口実を探った³¹⁾。翌23日、大鳥の指示により混成旅団は朝鮮王宮を包囲し、時の閔氏政権に対する最大の抵抗勢力であった大院君・李昰応を引き出し、親日政権を樹立した。しかし、甲午政変と呼ばれるこのクーデターは結局朝鮮側の積極的な協力を得られず、親日的な近代国家建設に

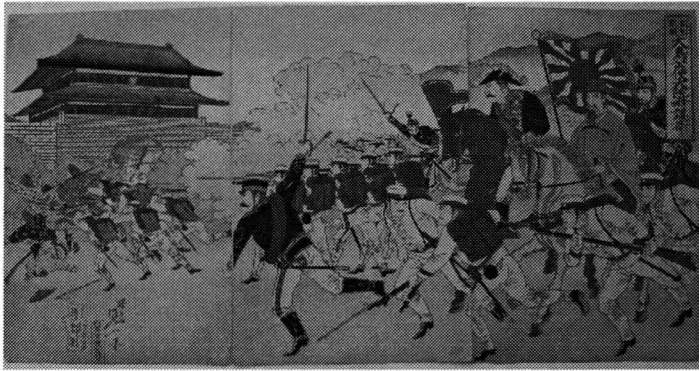


写真6 「甲午政変」に関する三枚物版画

むけての体制作りをするという、大鳥の新政権構想は画餅に帰した。さらにまた、彼は日本との戦争を欲しない清国側を挑発することも出来なかった。

しかし、2日後、事態は急展開する。すなわち、豊島沖で日清両国の海軍が衝突(豊島沖海戦)した。両国はこの海戦によって全面戦争に突入し、大鳥の「外交努力」は半ば無駄に終わった。

大鳥のこうした強硬姿勢はもちろん陸奥外務大臣の指示や黙認の下でとられたことは言うまでもない。庶民にとって大鳥は開戦外交のヒーローであった。彼の活躍ぶりは数多くの三枚物の版画で表現されている。写真6もそのひとつで、「朝鮮京城大鳥公使大院君ヲ護衛ス」とその表題にある。右端の人物が大鳥義昌少将(混成旅団長)であろうし、右から2番目が大院君、同じく3番目が大鳥公使である。さらに数は少ないようであるが、大鳥の土人形も作られた。次ページの写真7の人形もそのひとつで、高さは38センチメートルと、かなり大ぶりである。また、写真8はガラス製のスライドとなった大鳥の肖像写真で、戦闘場面や朝鮮国王・高宗などが一組となったスライド写真集の内の一枚である。この写真と比べると、写真7の土人形は特に髭など、大鳥の特徴をそれなりに表わしていると言える。

ここで土人形について少しふれておきたい。それは江戸時代から明治時代にかけて全国各地で生産された。江戸時代の三大農学者の一人として名高い大蔵永常の著作『広益国産考』に、それに関するまとまった記述がある³²⁾。東京の老舗・人形問屋「吉徳」の10代目当主・山田徳兵衛によれば、その生産地は全国にわたって100余りにのぼったという³³⁾。その主たる生産地は京都、博多、名古屋以外に農村部が多く、その製法は土をこね、型に入れて成型し、さら



写真7 大鳥公使の土人形



写真8 大鳥公使の肖像写真

に素焼きにして胡粉を塗り彩色するというものであった³⁴⁾。また、江戸時代においてそれは天神・子守・雛など三月節句ものと金時・鯛抱き人形、武者人形など五月節句ものとに大別され、厄事災難除け、出世、開運祈願に用いられるとともに、遊び物、飾り物であった。しかし、明治になると鎮台(将兵の意)ものをはじめ「時勢に応じた工夫」が試みられ³⁵⁾、描かれる素材は多様になった。大鳥公使の人形もこうした〈多様化〉の一環であろうが、日露戦争以前に特定の人物が人形に描かれた例は少ない。それだけに、この人形の存在は、大鳥が民衆の間でヒーローであったことを物語っていよう。

さて、豊島沖海戦の4日後、大鳥少将指揮下の混成旅団は、朝鮮半島南部の完全な制圧のため、牙山・成歙に駐屯する清国軍を攻撃し、これを敗走させた。かくして、日本側は陸、海ともに緒戦を制した。この緒戦において長らく国民に膾炙することになるヒーローが誕生する。木口小平がそれである。第21連隊第12中隊は、7月28日夜半、雨と泥濘に苦しみながらの行軍の最中に敵の待ち伏せを受けて混乱し、苦戦に陥ったがラッパ手の彼は敵弾に当たっても「突撃」ラッパを吹き続け、隊の仲間を励まし、死んでもラッパを放さなかった、とされる³⁶⁾。当初、この「垂死のラッパ手」は同連隊の白神源次郎といわれたが、その後陸軍によって木口と訂正された³⁷⁾。しかしその何れにせよ、その後この話は忠勇美談として広く国民に受け入れられた。「弾丸咽喉を貫けど、熱血器官に溢れど、喇叭は放たず握りつめ、左手に杖つく村田銃」の歌詞で有名な軍歌「喇叭の響」に歌われ、修身の教科書にも載った³⁸⁾。日清戦争後、このヒーローは人形となり、軍歌や修身の教科書の記事とともに忠勇美談の媒介者となった。

明治20年代から30年代にかけ、軍人土人形が日章旗を担いだ「馬乗り鎮台」や「旗持ち鎮台」などと並んで多く作られた。「喇叭手」の土人形(写真9)もそのひとつである。この兵士は「喇叭の響」の歌詞の通り、右手でラッパを握り締め、左手は銃で杖をついている。

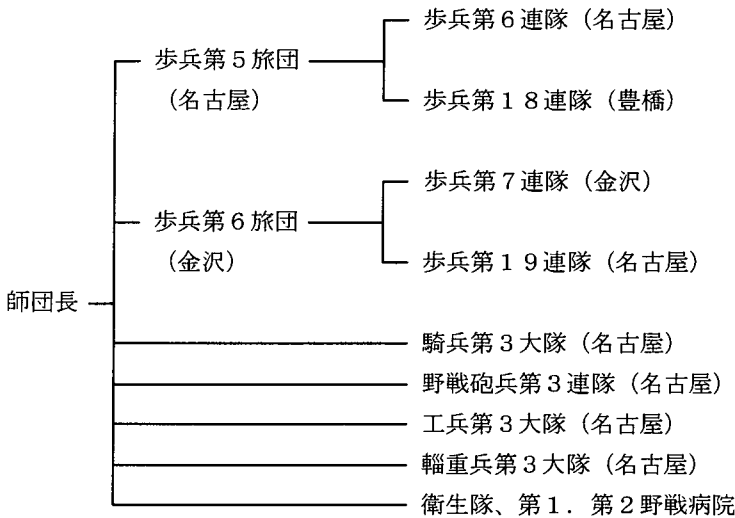


写真9 「喇叭手」の土人形

第5師団に続き、第3師団の朝鮮派遣が決定されたのは8月14日である。そもそも第3師団は明治6(1873)年に六鎮台のひとつとして創建され、第3軍管区を管轄した名古屋鎮台がその原点である。明治21年、鎮台は師団に改編され、名古屋鎮台は第3師団となった。それはその当時静岡、愛知、岐阜、三重の東海4県と富山、石川、福井の北陸3県、合計7県を軍管区とし、この7県の青年男子でもってその主力が構成された(なお、日清戦争後の明治29年、第9師団〔金沢〕が創設され、北陸3県がその管区に移された)。9月1日に発令された第一軍の編成・戦闘序列によれば、第3師団の組織はおおむね次のようである³⁹⁾。

第3師団(名古屋)

* () 内は司令部所在地または衛戍所在地



この第3師団が朝鮮に渡ったのは8月下旬から9月中旬にかけてである。まず、佐藤正大佐が率いる歩兵第18連隊を基幹として砲兵、工兵、騎兵、衛生の各隊を加えた支隊が編成された。この部隊は8月25日から28日にかけて広島市の宇品を出発し、27～30日にかけて朝鮮半島日本海側の玄関口・元山に上陸した。歩兵第18連隊長である佐藤大佐が率いるこの部隊は、上陸地の元山にちなんで元山支隊といわれる。続いて歩兵第6連隊が、9月9日から20日にかけて元山に上陸した。しかし、すでにこの時、朝鮮半島南部は先発していた第5師団によって漢城を含めてほぼ制圧され、朝鮮に派遣された清国陸軍の主力は平壤に集結していた。

平壤は言うまでもなく朝鮮半島北部の中心に位置する要衝であり、それは高さ10メートルの堅牢な城壁で囲まれ、その西南には大同江があり共に敵の侵入を阻んでいた。清国はそこに衛汝貴の指揮する盛字軍6000、同じく馬玉崑の毅字軍2000、同じく左宝貴の奉軍3500そして先の牙山・成歎戦の敗走兵3000による約1万5000の兵力を集結させていた。総指揮官には成歎を脱した葉志超が任じられた⁴⁰⁾。

総兵力1万2000を擁する日本軍による平壤への総攻撃が開始されたのは9月15日である。第3師団所属の4個連隊なかでこの攻撃に参加したのは先発した歩兵第18連隊のみであり、それを基幹とした元山支隊は第5師団の指揮下に入っていた。9月13日平壤を間近にした順安にやっと到着した元山支隊であったが、15日当日の食料は、常食は無く僅か乾パン2日分

という有様だった⁴¹⁾。

ところで、平壤の清国軍の抵抗は頑強であった。15日午前0時を期して総攻撃を開始した日本軍であったが、正面を攻撃する歴戦の大島旅団は平壤城内の清軍陣地を抜くことができず総退却を余儀なくし、西正面の第5師団主力もこの日の攻撃に失敗した。これに対し、立見旅団と元山支隊とは奮戦し、特に歩兵18連隊の三村中尉の一隊が玄武門をよじ登ることに成功した。『歩兵第18連隊史』は次のように記している。「〔三村〕中尉は部下と共に楼門にかけあがる。…〔中略〕… 激しい狙い撃ちが集中した。中尉の一隊はやっと楼上の低い庇に身を隠し、敵弾を防いだ。清軍は5連発銃、味方は単発、しかも持っている弾薬は〔一人につき〕75発、このままでは危ない。13名が苦心の末に城内に入り込んだ。負傷者が出る。このとき、原田重吉は太田政吉一等卒とともに、三村中尉の命令をうけて門扉に駆けよった山と積まれた石を退け、二人は門に手をかけた。動かぬ。原田一等卒は錠に両手両足をかけて満身の力をひきしぼって城門を引き開けた。午前7時半であった。それから1時間余り10数名の将兵は清軍の集中砲火を浴びて孤立無援、よく玄武門にとどまり…」⁴²⁾。

ここにまた、ヒーローが誕生することとなった。原田重吉である。彼はこの功績により金鵄勲章功7級を授けられ、その後「玄武門一番乗り」の勇者として長く民衆の記憶に留められることとなる。多くの版画にその姿が描かれ、また芝居にもなった。

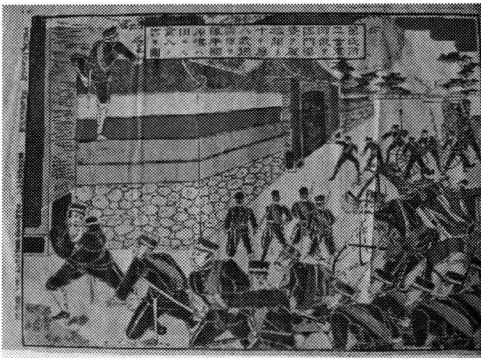


写真 10 城壁をよじ登る原田重吉



写真 11 玄武門楼上で奮戦する原田重吉(部分)

版画について言えば、写真10、11もそのひとつで、共に多色刷である。写真10は名古屋市南園町283番戸(現在、御園座がある付近)在住の山田猪三郎の製作・発売によるもの。描かれている内容はたぶん想像によるところが大きく、「第三師団豊橋十八聯隊原田重吉氏玄武門ヲ開キ我軍平壤ニ入り清軍ヲ撃破リ厚德頭ハスノ図」と表題が付けられている。写真11は江戸時代以来の精緻な版画で、錦絵と呼ばれるものである。

他方、戦争芝居の先鞭をつけたのは、自由民権運動のオッペケ節で名高い川上音二郎である。彼が明治27年8月に東京の浅草座で「壮絶快絶日清戦争」を上演して以来、戦争芝居は広く人々のなかに広まっていった⁴³⁾。「玄武門一番乗り」もその絶好の演目となった。東京の新富座でのそれは原田自身が自ら役者として出演して「原田一等卒」を演じ、軍や人々の響きをかかったこともあった⁴⁴⁾。原田は「愛知県三河国東加茂郡豊栄村大字日明28番戸」在住の農民であった。彼は妻と子供の三人暮らしで、僅かな田畑を持ってはいたが、生活は困窮していた、という⁴⁵⁾。

ところで今日愛知県三河部で、「玄武」と書かれた原田の書をみることはそれほど珍しいことではない。右の写真の書もその一つである。この「玄武」は平壤北部の城門・玄武門を指すことは言うまでもない。そもそも「玄武」とは陰陽五行説における北方の神であり、亀と蛇を合体させた生き物をその化身とする。少なくとも原田はそのつもりで、「玄武」の下にその動物を描いたのであろう。原田が復員してから何年かはこのような彼の書が珍重され、彼は多数それを書き、販売していたようだ、との話を私自身、歩兵第18連隊の衛戍地であった豊橋の古老から聞いたことがある。原田のこのような行為は貧困ゆえのことであろう。同じヒーローでも死んだヒーロー木口は修身の教科書に載り、国民にとって永遠のヒーローであった。ちなみに、木口は昭和20(1945)年までに5回にわたって改訂された、修身の国定教科書に合わせて4回にわたって取り上げられた⁴⁶⁾。これに対し、原田の場合はそうではなかった。日露戦争の頃になると、生身の人間である彼の社会的権威は急速に衰えていった⁴⁷⁾。



写真12 原田重吉の書

さて、頑強な要塞都市であった平壤であるが、わずか1日で陥落した。清国軍の内部崩壊がその原因である。平壤を脱し清国領内での日本軍殲滅を説く葉総司令と平壤死守を強く主張する左宝貴將軍との対立である。9月15日午前11時、左宝貴は恩賜の制服を着用し、僅か300の手兵を引きつれ七星門より撃って出たが、たちどころに歩兵第18連隊に捕捉され敢無い戦死を遂げた⁴⁸⁾。その日の午後4時40分、平壤に白旗が揚がった。平壤占領後、歩兵第18連隊は到着した第3師団の指揮下に復帰した。こうして勢揃いした第一軍は敗走する清国軍を追撃しつつ北上し、10月末には鴨緑江を越え、清国領内に入った。

日本が掲げた対清戦争の「戦争目的」の一つは朝鮮の独立であった⁴⁹⁾。ちなみに、明治27年5月8日、成歎に布陣した清国の太原鎮総兵・聶士成は、朝鮮民衆に対する論達のなかで朝鮮は清国の属邦であることを明言している⁵⁰⁾。漢城を失った清国にとって平壤は「属邦」朝鮮を死守するための最後の拠点であった。平壤の攻防はこの戦争の天王山であった。それゆえ、左宝貴將軍の戦死については国民の関心もたかく、しばしば日清戦争双六に登場する。ここに掲げた単色の双六(写真13)にも左宝貴の戦死が扱われている。絵が上下逆になっているが、2



写真13 「征清雙六[双]語六」(部分)

段目左 2 コマ目が、その場面である。双六はそれ自体ひとつの世界であり、価値体系である。一連の出来事や世界を、庶民は双六遊びを通じて手軽に擬似体験できる。「朝鮮問題」の存在や大島公使の帰任あたりが振り出しで、広島の本営や平壤陥落などが上がりであることが多い。

ところで、この戦争での日本軍の連戦連勝ぶりは国民にどのように受け取られたのだろうか。倉敷で育った社会主義者・山川均は後年次のように回顧している。「…戦争を身近に体験することはなかった。豊島沖の海戦につづく数々の勝利や大勝利、「垂死のラッパ卒」をはじめ、次々につたえられてくる武勇談や功名談から受ける戦争の印象は、危険でも脅威でもなくて、ただこのうえもない勇壮なものだった。大勝利の報道がくると、町の人々は赤いジュパンなどで『日本勝った、日本勝った、シナ負けた』とか、『エライやっちゃ、勝ったぞ、負けなよ』などとどなって踊り狂うた。敵国人は劣等民族で、まともにシナ人と呼ぶものではなく、『チャンコロ』とか『チャンチャン坊主』と呼ぶことになっていた⁵¹⁾。同じようなことを東京で田山花袋も体験（『東京の三十年』）している。日本国民の間では、戦中において清国に対する敵愾心は高まり、戦後において負けた清国に対する侮蔑感がたかまった。戦後、子供達が清国人を見ると「日本勝った、シナ負けた」とはやし立てる光景が絵などで今日に伝えられている⁵²⁾。

それはまた、玩具にも見られる。以下の写真のうち 2 枚は「馬乗り鎮台」といわれる土人形の一種で、馬に乗った日本の将校が清国の兵士の弁髪をつかんで引きずっている(写真 14、15)。他方では日本人の兵士が弁髪の清国兵を打ち据えている(写真 16)。その人形の大きさは共に横幅 25～30 センチメートル、高さ 25～30 センチメートルである。



写真 14



写真 15



写真 16

戦中から戦後、こうした土人形が数多く作られ、国民に受け入れられていったようである。土人形はどちらかと言えば、伏見人形など高級な人形を買うことが出来ない人々のものであった。特に三河瓦の伝統を持ち、三河土人形の産地であった愛知県東部(いわゆる三河)で、こうした人形が多数焼かれたと言われる⁵³⁾。かかる意匠の「馬乗り鎮台」もまた民衆の戦意高揚と清国に対する侮蔑感を煽ったであろう。逆に、国民の敵愾心と侮蔑感がそのような土人形を作らせ、広く国民に受け入れさせたのかもしれない。一方、広島に大本営を進め、戦争を親率し、軍人天皇のイメージを国民の間に作り上げつつあった明治天皇についても、比較的大振りな土人形が多数製作された。

むすびにかえて

明治36(1903)年に、日清戦争時の第一軍戦死者記念碑が名古屋市、広島市に相ついで建てられた。前者は5月、後者は9月である。時あたかも「満州撤兵」問題をめぐり日露間が破局に瀕しつつある時であり、政治的にも社会的にも対露強硬論が日本国内に横溢しつつあった。こうした状況下で、この記念碑はアジアの大国・清国との戦争の勝利と「三国干渉」とをそれを見る者をして思い起こさせ、しいては国民の間に来るべきロシアとの戦争への自覚を促したのかもしれない。

それにしても同じ「軍隊の城下町」であった名古屋市と広島市とでは、「記念碑」建設に向けて多少の温度差があったように思われる。名古屋市では、明治32(1899)年4月に、その建設に伴う道路の拡張のための県有地譲渡の決定がなされ、かつ市会でその建設に係る予算が承認され建設に向け大きな一歩を踏み出している。他方、広島市では明治35(1902)年2月にやっと予算が確定し、建設予定地の地質調査がなされたのはその年の6月のことである。

また、名古屋市はその建設を市街地の中心に求めたが、広島市の場合は第5師団の西練兵場という軍用地であった。どうも「記念碑」については、広島市より名古屋市の方が積極的であったようである。その後、名古屋市がそれを大切にしたいかという、必ずしもそうではなかったのではないか。大正8(1918)年3月、名古屋市会は、「記念碑」が交通の障害であるばかりでなく、「市区ノ発展繁栄ヲ阻害スル事少ナカラス」⁵⁴⁾として、全会一致で「記念碑」移転の市長宛の意見書を採択した。すでに述べたように、その移転がなされたのは翌9年12月である。日泰寺境内の片隅に追いやられてしまった「記念碑」ではあったが⁵⁵⁾、そのことによって戦災にもあわずそれは無傷で存在し続け、日清戦争の記録を今に雄弁に伝えている。

なお、「記念碑」はその後の戦争での戦死者の記念碑や生活雑器などの形や意匠にも影響を与えたようだ。例えば、日露戦争(1904~1905)の激戦地であった旅順の「203高地」(現在は大連市旅順区)に建てられた慰霊塔は砲弾型であったし、先端がお猪口であり、それにお銚子の蓋の機能を持たせた砲弾型の酒器がその後多数作られ、国民の間に浸透したようでもある。さらに、昭和10年代には砲弾型の「報国貯金箱」が多く作られたようだ。

さて、江戸時代から尾張、三河の各地でも天神様、内裏雛そして歌舞伎の名場面などを題材に作り続けられてきた土人形＝土雛であるが、日清戦争で新たに誕生したヒーローがさらにそれに加えられた。大鳥公使、喇叭手、明治天皇などがそれで、広島に大本営を進出させて「自ら」戦争指導にあたった明治天皇の土人形は今日でも骨董屋でしばしば見かけられる。日清戦争中および戦後に多数作られた「馬乗り鎮台」の中には、清国兵の弁髪を引きずっているものが少なくなく、それはその時期における日本国民の清国に対する敵愾心と侮蔑感を反映し、それを記録している。さらに、今は忘れられた郷土の英雄・原田重吉は、当時の錦絵と言われる精緻な多色刷版画の重要な題材でもあった。

こうした版画や人形など玩具さらに記念碑(日泰寺の記念碑以外も)を教材とすることにより、受講生の関心を引き出しつつ、今後、日清戦争の政治外交史・社会史を講義として組み立ててみたいと思っている。

注：

- 1) この「旅順虐殺事件」の発生とその国際社会への波紋や日本の政治指導者ならびに陸軍の対応について、藤村道生はその著書『日清戦争』（岩波新書、1973年、132～133ページ）でふれている。また、この事件の真相に迫るべく、詳細に調査し論じた労作として井上晴樹『旅順虐殺事件』（筑摩書房、1995年）がある。なお、中国では1896(明治29)年に犠牲者の慰霊のため「萬忠墓」が建てられ、中華民国時代(1922・1948年)さらには現在の中華人民共和国時代(1994年)にそれぞれ墓碑が再建され今日に至っており、100周年にあたる1994年には「甲午戦争旅順殉難同胞百年祭奠」が執り行われた(張波責任編集『旅順口近代戦争遺跡』、大連出版社、1999年、35～39ページ)。
- 2) こうした史・資料を使っている最近の研究として、書籍に限って挙げれば①大谷正・原田敬一編『日清戦争の社会史』フォーラム・A、1994年、②高橋秀直『日清戦争への道』東京創元社、1995年、③檜山幸夫『日清戦争―秘蔵写真が明かす真実―』講談社、1997年、④大江志乃夫『東アジア史としての日清戦争』、立風書房、1998年、⑤斉藤聖二『日清戦争の軍事戦略』芙蓉書房、2005年、などがある。
- 3) 碑に注目した数少ない研究のひとつとして、籠谷次郎「死者たちの日清戦争」(前掲『日清戦争の社会史』に第4章として所収)がある。また、木下直之はその著書『世の途中から隠されていること』(晶文社、2002年)所収の「はしらかしら」上・下でこの「記念碑」について論じている。なお、近年、国立歴史民俗博物館によって、都道府県単位で現存する近現代の戦争に関する記念碑について調査が実施され、その一覧表が作成された(国立歴史民俗博物館編・刊『近現代の戦争に関する記念碑』、2003年)。
- 4) 参謀長の小川は、明治20(1887)年、参謀本部第2局長として、シベリア鉄道が起工された直後ロシアを始めとするヨーロッパ列強の本格的な極東進出に備え、朝鮮半島を事前に確保するためにはその宗主国である清国との戦争は避けられないとの認識を前提とした「対清征討策案」を完成させ、具体的な作戦計画を立案していた(藤村、前掲書、45ページ)。すなわち彼は、当初から対清戦争の実質的な「参謀長」でもあった。
- 5) 山県の「主権線―利益線」の概念は、議会開設のほぼ半年前の明治23年3月、青木外相に宛てた彼の意見書「外交政略論」(大山梓『山県有朋意見書』〔原書房、1966年、196～200ページ、所収〕に明らかである。
- 6) 広島市役所編刊『広島市史』(721ページ、1922年)、広島湾要塞司令部編『広島市地名索引』(大正1年原刊、1982年、あき書房復刻版第六其の四「名所古跡」の項をそれぞれ参照)。
- 7) 広島市役所、前掲書、721～2ページ。
- 8) 浜島書店編集部編『新詳日本史』(浜島書店、2004年)、212ページ。なお、本書は私が担当する現代社会学部科目「日本政治外交史」の教科書でもある。
- 9) 参謀本部編『明治二七八年日清戦史』第8巻(東京印刷、1907年)付録第121「減耗人員師団別一覧表」参照。
- 10) 前掲『広島市史』721～722ページ。
- 11) 『名古屋市史』は大正、昭和、平成と3回刊行されているが、凱旋碑が建設されたという記述はその何れにもない。
- 12) 仲小路彰『日清戦争』上(世界興廃大戦史・日本戦史・第24巻、戦争文化研究所、1939年)、76ページ。
- 13) 大江、前掲書、377ページ。
- 14) 明治35年5月25日付『芸備日日新聞』(国会図書館新聞資料室所蔵マイクロフィルム)。
- 15) 参謀本部編『明治三七八年日露戦史』第1巻(東京偕行社、1912年)、51ページを参照。
- 16) 仲小路、前掲書、74～76ページ。
- 17) 名古屋市役所編・刊『名古屋市史』政治篇第3(1915年)、337ページ。
- 18) 靖国神社の大村益次郎像に関する説明板によれば、「大熊氏廣は、明治9年工部美術学校の開設と同時にその彫刻科に入学し、イタリア人教師ラグーザの薫陶をうけ、明治15年首席で卒業する。卒業後は工部省に入り、皇居造営の彫刻制作に従事、明治18年に大村益次郎の銅像製作を委嘱されるとその任を重んじ彫刻制作のため欧州に留学する。パリ美術学校ではファルギエルにつき、ローマ美術学校ではアレグレティ、さらに巨匠モンテヴェルデに入門した。大熊氏廣の帰朝後、漸く明治26年に至り、わが国最初の西洋式銅像が建立された。」なお、木下直之は前掲書においてパリコンミュンの際ヴェンドーム広場の「帝国円柱」が倒されたが、その上にはナポレオンの銅像のようなその時代を象徴する銅像が置かれていた、としてこれが大村益次郎像とそれを載せた碑身のモデルとなったことを示唆している(前掲書、68～69ページ)。
- 19) 版画(錦絵)では楊斎延一「靖国神社大村大輔之肖像」(明治26年)、同「九段坂靖国神社之景」(明治36年)がある。なお、この2点はいずれも靖国神社遊就館編刊『靖国神社遊就館所蔵・東京名所錦絵展』(1986年)に掲載されている。
- 20) 内閣官報局編『明治二十六年職員録』(1893年1月刊)85ページ、参照。なお、「記念碑」が铸造された明治33年には、彼は三等技手として築城部本部に勤務していた(印刷局編刊『明治三十三年職員録』1900年4月、212ページ、参照)。
- 21) 最新の「名古屋市史」である『新修名古屋市史』の第8巻「年表」を除き、愛知県庁編刊『愛知県史』第4

- 巻、1940年、1047ページ、『なごや100年—市制100周年記念誌—』（名古屋市総務局、1989年）64ページ、前掲『近現代の戦争に関する記念碑』443ページ、宮田昭『絵巻書で見る日本近代』（青弓社、2005年）78ページ、所載のそれぞれの記述または記事は、その何れも竣工が明治33年か34年となっている。その何れも正しくない。なお、最新の「名古屋市史」には「記念碑」に関する記載がないが、その別冊である「年表」は明治36年5月となっている。が、その典拠が示されていない。
- 22) 名古屋市会事務局編・刊『名古屋市会史』第2巻（1940年）、478ページ。
- 23) 愛知県議会事務局編刊『愛知県議会史』第3巻（1959年）、158～159ページ
- 24) 前掲『名古屋市会史』第2巻、479・530ページ。
- 25) 明治35年5月7日付『新朝報』（豊橋市立中央図書館所蔵マイクロフィルム）
- 26) 明治36年1月1日付『芸備日日新聞』。
- 27) 同上
- 28) 明治35年6月11日付および6月19日付『芸備日日新聞』。
- 29) 明治36年5月6日付『新愛知』（豊橋市立中央図書館所蔵マイクロフィルム）。
- 30) 同上。なお、引用文中の〇〇は判読不能を表す。
- 31) 以下の大鳥を中心とした開戦外交については藤村道生『日清戦争』（岩波新書）や檜山『日清戦争—秘蔵写真が明かす真実—』を参考にした。なお大鳥は明治33年5月、「多年の勲功」によって華族に叙せられ男爵を授けられた。
- 32) その「六之巻」に詳しく書かれている。土人形に関する記述「六之巻」は大蔵永常・土屋喬雄校訂『広益国産考』（岩波文庫、1995年）230～246ページに所収されている。なお、大蔵は渡辺嶺山の推挙により興産方として三河の田原藩主に仕え、実際に田原で土人形作りを指導した。
- 33) 山田徳兵衛『日本人形史』（講談社学術文庫、1984年）、294ページ。
- 34) 土人形の製法については、大蔵、前掲書、232～244ページを参照。
- 35) 山田、前掲書、295、304ページ。
- 36) 西川宏『ラップ手の最後』（青木書店、1984年）、128ページ。
- 37) 堀内敬三『日本の軍歌』（実業—日本社、1969年）、99～105ページを参照。
- 38) この忠勇美談の形成とその後の展開については西川、前掲書が詳しい。
- 39) 大江、前掲書、375～376ページを参照。
- 40) 同上、379ページ。
- 41) 兵東政夫『歩兵十八連隊史』（歩兵十八連隊史刊行会、1964年）、379ページ。
- 42) 同上、46ページ。
- 43) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争—帝国への歩み』（刀水書房、2003年）、50ページ。
- 44) 明治33年4月19日付『読売新聞』。
- 45) 明治27年10月16日付『読売新聞』。
- 46) 唐沢富太郎『日本人の履歴書』（読売新聞社、1967年）、144～145ページ参照。
- 47) 例えば、明治37年6月17日付『読売新聞』では、日露戦争のヒーローとの比較で、原田は否定的に論ぜられている。
- 48) 兵東、前掲書、49～50ページ。
- 49) 宣戦の詔勅の一節に「朝鮮ハ帝国カ其ノ始爾啓誘シテ列国ノ伍伴ニ就カシメタル独立ノ一國タリ」（村上重良『近代詔勅集』、新人物往来社、159～160ページ）とあるように、この詔勅では「朝鮮の独立」という表現が出てくる。
- 50) 博文館編・刊『日清戦争実記』第1号（1894年、4ページ）。
- 51) 山川菊栄、向坂逸郎編『山川均自伝』（岩波書店、1961年）、128ページ。
- 52) 青木美智男他『日本史B』（大阪書籍、2004年）、263ページ参照。
- 53) ちなみに郷土玩具の研究者・亀井鑛は、その著書『東海の郷土玩具』（中日出版社、1979年）において「愛知県衣浦湾を挟んで、尾張乙川と三河大浜・棚尾一円は東海地方のみならず、全国一二といつていいほどの土雛人形〔土人形—引用者〕の生産地だった。必ずしも歴史は古くなく、江戸時代から明治時代にかけてが興隆期から全盛期だったといつていいだろう」（26ページ）と述べている。
- 54) 前掲『名古屋市会史』第4巻（1940年）、229ページ。
- 55) 「記念碑」の移転先として、なぜこの地が選ばれたのか。その理由は不明である。平成18年1月6日、私は日泰寺の管理事務所にこの点について訊ねてみた。いろいろお調べいただいたようだが、記録は残っていないし、わからないとの回答であった。日泰寺はタイ国より日本に贈られた仏舎利を祀るために超宗派で建立された（1905年）寺院であったことから、その移転先に選ばれたのかもしれない。また、日泰寺の裏には月ヶ丘陸軍墓地があったことも考慮されたものと思われる。

※本稿は、平成14年度愛知淑徳大学研究助成による研究成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。